

共に歩む

～スーダン、東北の現場から～

認定NPO法人ロシナンテス理事長 川原 尚行

与えるだけではない NGOの活動

タンザニアのセレンゲティ国立公園。在タンザニア日本国大使館に医務官として勤務していたころ、その大自然を巡るサファリツアーに何度も参加した。ある時、残った弁当を野生のハゲタカにあげていた観光客を監視員が注意しているのを目にした。「食べ物を与えられると、やがて人を狙うようになる。そして、人から餌をもらえなくなると、自らの力で餌を取る方法を忘れ、生きていけなくなってしまう」。それはハゲタカにとっても、不幸の始まりかもしれない。そのことが、ずっと心のどこかに残っていた。

目の前で困っている人を助けたいと、外務省を辞職後にNGOを設立し、長年内戦が続いたアフリカのスーダンで国際協力に携わっている。我々が拠点としているのは東部のある村。無医村で住民たちは医療サービスを受けることができなかつたため、村に診療所を建設した。井戸を掘り、学校も建てたが、細心の注意を払ったのが、彼らが「依存しない」ようにすることだった。

スーダン政府が自国の社会インフラを整える力があればいいのだが、現時点でそれは難しい。だから我々がこ

にいるのだが、住民たちが自力で解決しようとするのを忘れてしまつては本末転倒だ。そこで心掛けているのが、「共に歩む」姿勢だ。

村で何か問題が生ずれば、住民と共に考え、共に解決する。診療所ができた時も、必要な医療機器をそろえるために、村人たちと政府の担当部署に足を運び、陳情を繰り返した。給水所が完成した時は水管理委員会を組織し、住民に水の販売や施設の維持管理を任せた。

先日、ポンプが故障したのだが、水管理委員会が修理の見積もりを取り付け、これまでの積み立ての中から修理費を捻出し、不足分は地元行政に補てんを依頼していた。自らの力で問題を解決する術を彼らは身に付けている。

人を育てる 国際協力

一番頭を悩ませたのが、医療スタッフの問題だ。当初は私一人で診療を行っていたが、現地の医療関係者に徐々に任せることにした。彼らは州の保健省から派遣されたスーダンの都市部出身。保守的な村の文化、住民との軋轢が生ずることもあり、我々日本人が間を取り持つことも多々ある。給与は保健省からの支払いに加え、ロシナンテ

スがインセンティブを支払っていた。診療所の運営を完全に村に任せた後は、時間外の診療費が彼らに配分される仕組みをつくった。結果、これは時間外の医療サービス改善にもつながった。いずれはこの地域出身の医療人材が必要と考え、村に女子学校を建設したところだ。

医療保険制度の導入も考えたが、住民の多くは農民、牧畜民であり、現金収入は限られる。そこで、農作物を納めることによりそれを医療保険に充てる、いわば江戸時代の年貢のような制度を紹介した。他のアフリカの国ではうまく機能しているケースもあり、この地域で広く普及すれば、地域に合った医療制度を確立できるのではないかなと思っている。

誰もが生き生きと 輝ける社会を

東日本大震災の発生直後から、東北でも活動を行っている。当初は避難所での巡回診療を中心としていたが、被災地の状況の変化に伴ってニーズも変わる。そこで2年目からは「健康農業」を始めた。仮設住宅などに住む高齢者に農作業に参加してもらおう取り組みで、引きこもり防止、生活習慣病の予防が目的だ。

みんなで畑仕事をし、収穫した野



ロシナンテスの事務局がある北九州市の小学校から絵のプレゼント



東北の被災地で健康農業の参加者と野菜を収穫

菜を使って昼ご飯を作り、おいしくいただくことが心身の健康につながる。そんな思いから「健康農業」と名付けた。東北の農村部で生まれ育った彼らは農業のプロフェッショナルだが、ロシナンテスのスタッフは素人。ここでは地元の方が先生、スタッフは教えしてもらおう立場だ。全国から若者にも参加してもらい、一緒に畑を耕している。彼らはボランティアとして来ているが、東北の地で多くのことを学んで帰っていく。

震災以降、国内外からの支援を受けて、被災地の人々は「ありがとう」と言う側だった。しかし健康農業の現場では、「ありがとう」と言われる立場になる。自分の役割があることで、人間の目は輝く。

西郷隆盛の遺訓集の中に、「実に文明ならば、未開の国に対しなば、慈愛を本とし、懇懇説諭して開明に導く可きに」とある。慈愛をなくして他国を支配するのは、文明国ではなく野蛮であるという。西郷隆盛の時代と現在は随分と違うが、芯の部分で、何ら変わっていないことに気付く。

<Profile>

かわはら・なおゆき

1965年福岡県出身。大学卒業後、外務省に入省し、医務官としてスーダンなど在外日本国大使館に勤務。2005年に辞職した後にロシナンテスを立ち上げ、スーダンと東北で医療を軸とした活動を展開している。

写真(下3枚)：内藤順司

村人と力を合わせて、グッディーヤと呼ばれるレンガ造りの家を建てる



村に給水施設ができてきれいな水が手に入るようになった



スーダンの村で診療を行う筆者

